

The Annual Report of East Asian Academy for
New Liberal Arts, The University of Tokyo (EAA)

The Annual Report 2024

東京大学東アジア藝文書院
2024年度活動報告書



E A A

東京大学東アジア藝文書院
EAST ASIAN ACADEMY FOR NEW LIBERAL ARTS, UTokyo

プロジェクトについて

● 組織図

東京カレッジ

UTokyo Future
Society Initiative

潮田総合学芸知
イニシアティブ (UIA)

社会
連携

ダイキン

教育

研究

リサーチ・ユニット

世界哲学と
東アジア

未来社会と
環境・健康

世界史と
東アジア

世界文学と
東アジア

藝文学

空気の
価値化

北京大学

ソウル大学校

ニューヨーク大学

ボン大学

オーストラリア国立大学

EAAコース

教養学部後期課程

「東アジア教養学」副専攻

東京大学東アジア藝文書院は、北京大学をはじめとする海外研究・教育機関との連携のもと、研究・教育・社会連携の三本柱を軸に据え、アジアの共通の未来を担う人材の育成を目指す組織です。そのための学問的な基礎として、わたしたちは新たに「リベラル・アーツとしての東アジア学」を構築していきます。わたしたちが考える新しい東アジア学とは、単なる東アジアの地域研究ではありません。より相互的で関与的な研究として、地域概念としての東アジアを超えて、アジア、オセアニア、そしてヨーロッパ、アメリカ、さらにはアフリカとの交通を重視した研究であるべきだと考えています。そのため、アカデミアにおける覇権言語である英語での活動を重視しながらも、そこに日本語・中国語をはじめ

とする世界諸語において蓄積されてきた知を接続し、多角的な交流の場を創出することを目指しています。

わたしたちは、「リベラル・アーツとしての東アジア学」の理念を「藝文書院」という名称に託しました。『漢書』藝文志という東アジア最古の目録であり学問のジャンルを構想した書物にちなむと同時に、教員と学生がともに学人として思考し実践していく共同体としての理想が「書院」の名に込められています。この場所から、東京大学の学問資源を最大限活用し、まったく新しい研究教育のプラットフォームを築き、今後の世界における大学の新しいあり方を示したい。これがわたしたちの願いです。

ユース生の情報

● 人数・所属部局の情報

	学年	人数	学年	人数
工学部	4年	2		
法学部	4年	3	3年	
教養学部	4年	7	3年	3
経済学部	4年	2	3年	1
医学部	4年	1		
文学部			3年	2
合計	4年	15	3年	6

第3期生修了者

EAAの必修の授業では、学友との縦のつながり、横のつながりを作ることができました。EAAには経済学部、理学部、医学部など様々なバックグラウンドの仲間が集まります。EAAという共通の場がなかったら出会っていなかったであろう仲間と過ごす時間を得ることができました。加えて、他学部の先輩・後輩と意見交換をすることで、自分にはなかった視点を築くことができました。

また、EAAのおかげで北京大学の元培学院への留学が叶いました。私が北京大学へ留学に行ったのは2年前で、中国が厳しいコロナ政策を敷いていた時でした。全学交換留学(USTEP)のプログラムでは、留学には行けなかったとは思われますが、EAAのプログラムのおかげで留学が実現できました。

第4期生修了者

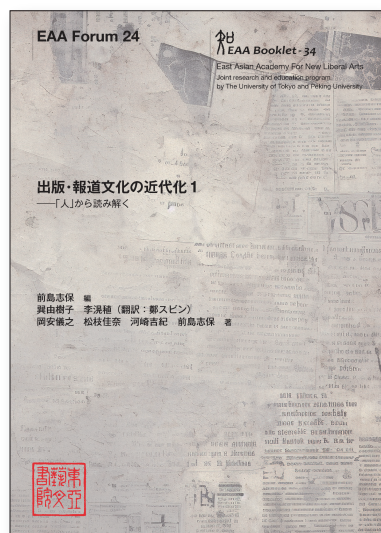
東アジア藝文書院での学びは、私の大学4年間で最もかけがえのないものであり、今の自分の大枠を作ったと言っても過言ではありません。東アジア藝文書院では、古典を学び、東アジアについて学び、ディスカッションを通じて相手の考え方を知り、中国からの学生をはじめ、専門や地域を越えた多くの人と交流し、4年次には北京大学での留学も経験しました。このように多様な人々と接して意見を交換するのは、私にとっては初めての経験でした。東アジア藝文書院はまた、自分と他者のあり方、自分と他者の意見が違って良いのだということを初めて教えてくれた場です。自分の在り方や真価は、他者の評価によって決まるものではないこと、また同様に、他者の在り方や真価が、自分の評価によって決まるものではないこと、これは私が東京大学、そして東アジア藝文書院で学んだもっとも大きなものです。この書院で、私は先生方が期待するほど努力家でも聡明でもなかった気がしますが、私自身はとても大きなものを得ました。

ブックレット案内

EAAでは活動の成果をブックレットとして刊行しています。ウェブサイトにて電子版を公開し、広く一般の方々にもご活用いただけるよう努めています。ブックレットは、教育・研究活動の記録であると同時に、社会との対話を促すメディアとしての役割も果たしています。

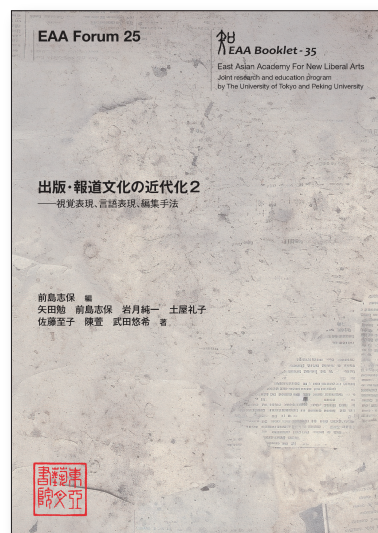
EAA Forum 24

出版・報道文化の近代化1
——「人」から読み解く



EAA Forum 25

出版・報道文化の近代化2
—— 視覚表現、言語表現、編集手法



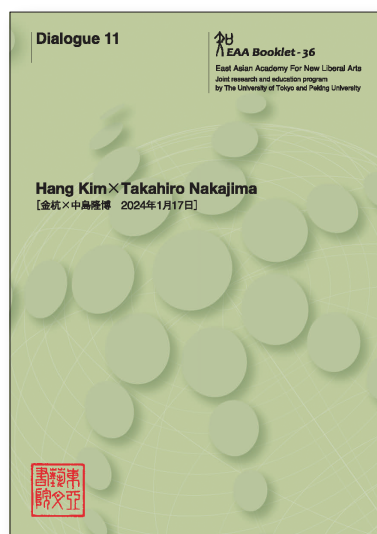
UIA Booklet 1

ともに成り行く道、ともに花する世界
——東アジアから考えるHuman Co-becomingと
Human Co-flowering



EAA Booklet-36 EAA Dialogue11

金杭×中島隆博



Summer Institute 2024

Student Report



教育活動

EAAは、教育と研究を分かťことなく結びつける場として構想されており、学生と研究者がともに古今東西の知に向き合い、多言語・多文化的な対話を通じて、「世界」を問い直す学びの機会を開いています。東アジアに根ざしながらも、地球規模の課題に応答する新たな教養のあり方を模索し、未来を構想する力を育むことを目的としており、講義・対話・フィールド学習を通じて、大学の内外、世代や専門分野の枠を超えて知をつなぎ、変化の時代に応答する実践的な教育を展開しています。

学術フロンティア講義

「30年後の世界へ——ポスト2050を希望に変える」(2024年度5 semester)

オムニバス形式で開講している学術フロンティア講義「30年後の世界へ」では、人類が長期にわたり直面する複合的な危機と共に生きる未来を見据えて、わたしたち人類の希望をいかに見出すかを主題に掲げています。2024年度は「復興の技法」「ロゴスの複雑化」「惑星時代の人間」の三つの柱を中心に、環境・政治・存在論の各側面から現代社会を問い直し、「危機の空気／空気の危機」の中で未来に関与する知のあり方を議論しました。

講義の様子はブログにて記録しており、そこでは学生たちによるリアクションペーパーの抜粋も掲載しています。受講者の率直な声を通じて、講義で交わされた多様な視点と対話の広がりをおうかがうことができます。



各回のテーマ

第1回	ガイダンス	
第2回	レジリエンスと地域の復興	溝口 勝 (東京大学大学院農学生命科学研究科)
第3回	人類はこれからどのような食生活をしていくべきか ——次世代栄養学とOne Earth Guardiansからの提言	高橋 伸一郎 (東京大学大学院農学生命科学研究科)
第4回	100年前の日仏交流と平和思想 ——「気象台」としての宗教学	伊達 聖伸 (東京大学大学院総合文化研究科)
第5回	外人にかたりかけること ——間際性(transnationality)の場面と異言語のかたりかけの政治	酒井 直樹 (コーネル大学アジア研究学科/東京大学東京カレッジ)
第6回	復興の未来	羽藤 英二 (東京大学大学院工学系研究科)
第7回	藻と人間:惑星サルベージとテラフォーミングの倫理	福永 真弓 (東京大学大学院新領域創成研究科)
第8回	空間・技術・創造力 ——建築史からの示唆	野澤 俊太郎 (東京大学教養学部/東アジア藝文書院)
第9回	人間復興と精神復興	中島 隆博 (東京大学東洋文化研究所)
第10回	いま「東洋」と「近代」を考えて、未来に何をのぞめるだろう？	富澤 かな (東京大学大学院人文社会系研究科)
第11回	分解の哲学 ——「食べる惑星」の脱領域的研究	藤原 辰史 (京都大学人文科学研究所)
第12回	パンデミックを銘記する	岩川 ありさ (早稲田大学文学学術院)
第13回	希望のロゴス ——危機における「生」について人類の智慧が教えてくれること	石井 剛 (東京大学大学院総合文化研究科)

EAAユース教養学部

後期課程「東アジア教養学」副専攻

「東アジア教養学」では、英語を主要言語とした演習型の授業を実施しています。毎回二名以上の教員が教壇に立って対話形式で授業を進めること、古今東西の古典の文献を皆で講読すること、北京大学からの留学生と東京大学の学生、そしてリサーチ・アシスタントを務める大学院生が共に英語でディスカッションをすること、これらが「東アジア教養学」の特長です。学生と教員が一つのコミュニティを成し、古典の叢智から学び、現代社会が直面する最先端の課題に取り組むための知的体力を共に養う、EAAならではの授業です。

2025年春 北京研修

2025年春、東京大学EAAユース・教員17名が北京を訪問し、北京大学元培学院や清華大学の日新書院・新雅書院での交流を通じて中国の大学教育と学生生活への理解を深めました。高考や寮生活に象徴される競争環境の中で学ぶ学生たちとの対話や、歴史的遺構の訪問を通じて、参加者は風景や制度、歴史、言語、友情など多様な視点で思索を深めました。多言語による議論と文化的実体験を通して、学びの広がりや国際的対話の可能性を実感する研修となりました。

Summer Institute

Summer Institute 2024は、東京大学と北京大学の学生が参加し、「気候／風土／文明」をテーマに仙台で開催されました。初日は松島や荒浜小学校、波分神社、閑上などを巡るフィールドトリップを通じて、自然災害と人々の暮らし、震災からの復興の取り組みについて学びました。宗教的風景や記憶の継承に触れながら、人間と自然の関係性について深く考察する機会となりました。翌日には、北京大学の渠敬東氏・張帆氏による講義が行われ、文明の形成と変容を考えるうえでの「風土」の概念の意義について議論が展開されました。サマーインスティテュートは、学生同士の交流や国境を越えた学び合いを促進する貴重な場となりました。



研究活動

EAAでは、ダイキン工業株式会社及び潮田洋一郎様から厚いご支援を頂き、国際的な研究交流の促進に努めて参りました。

「世界哲学と東アジア」「世界史と東アジア」「世界文学と東アジア」「未来社会と環境」「潮田総合学芸知イニシアティブ」という五つのユニットを主軸として、学問領域・世代・国境を越え、自由闊達な議論の場を継続的に創出し続けること。これがEAAの研究活動の目標です。

ユニット1 世界哲学と東アジア

本ユニットは本年度、国際的な日本哲学ネットワークの構築、及び国際的な中国学ネットワークの構築を目指して活動してきました。

2023年度より発足した「Japanese Philosophy Network」では、国内外において日本哲学研究に従事している研究者を招聘し、研究会を定期開催しています。2024年度には計6回開催しました。

ヤナ・ロシュカ氏講演会「Sinology and Chinese Studies in Europe」、シンポジウム「惑星時代の中国学(Sinology in the Planetary Era)」では、単なる地域研究ではなく、より普遍的な価値を創造するための学的領域として中国学を捉え直す試みを行いました。

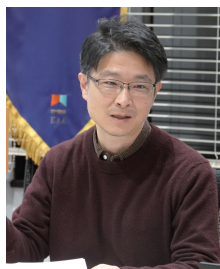
このほか、ダヴィッド・ラブジャード氏（パリ第1大学）による連続講演会も開催されるなど、多様な研究交流が実現されました。



ユニット2 世界史と東アジア

本ユニットは本年度、「『小国』の経験から普遍を問い直す」及び「多文化共生を宗教から考える」という二つのテーマを軸に活動を進めてきました。シリーズ「『小国』論セミナー」では、近代国民国家のオルタナティブとしての「農本主義」「愛郷心」を手がかりに「小国」の可能性や、東北や沖縄といった周縁とされる地域から国家を逆照射する視点の重要性が検討されました。

また、ベルナール・ガニョン氏（ケベック大学リムスキー校）やダヴィッド・クサンス氏（シェルブルック大学）を招聘し、ケベックやフランスの具体的事例に基づきながら、宗教的多元性とナショナリズムの衝突という問題について論じて頂きました。こうした研究交流を通して得られた成果はユニット所属教員である伊達聖伸氏の著書『もうひとつのライシテ』（岩波書店、2024年）に結実しています。



ユニット3 世界文学と東アジア

本ユニット説明ではこれまで、小説家の平野啓一郎氏と本ユニット所属教員の武田将明氏を中心として、〈現代作家アーカイヴ〉というプロジェクトを継続的に展開してきました。現代を生きる著名作家に対して文学研究者がインタビューを行うこの取り組みは、現代日本文学の様相を後世に伝える貴重な取り組みです。本年度は若手文学研究者の平井裕香氏が聞き手となって、小説家の高樹のぶ子氏のお話をお伺いしました。また、本ユニット所属教員の前島志保氏を中心となって組織している「ジャーナリズム研究会」では、国内外の研究者を招聘し、出版文化を主な検討対象として批判的な比較研究を行っています。研究会の成果はEAAブックレットとして刊行されています。



ユニット4 未来社会と環境・健康

本ユニットでは今年度、大規模な国際研究交流事業として「デリダ没後20年アジアシンポジウム『他者の翻訳——戦争・宗教・生—死』」を行いました。未来社会を構想するために不可欠な要素であるのは他者への想像力です。フランスを代表する世界的哲学者であるジャック・デリダ（1930–2004）の没後20年を記念し、アジア圏を中心としたデリダ研究者が一堂に会する大規模なシンポジウムを開催しました。教員と学生が一丸となり、西洋哲学をアジアという場から新しい形で発信したこの企画は、EAAならではの取り組みであると言えます。



ユニット5

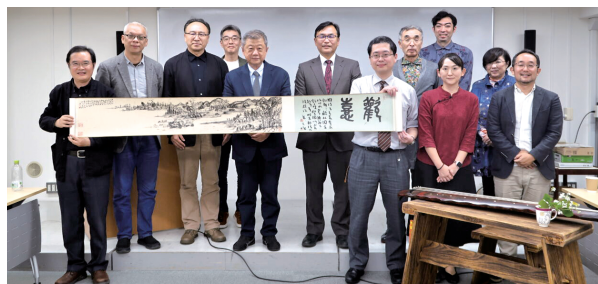
Ushioda Initiative of Arts 潮田総合学芸知イニシアティブ

潮田総合学芸知イニシアティブ(Ushioda Initiative of Arts=UIA)は、潮田洋一郎様より頂いているご寄附によって運営されているプロジェクトです。本年度は「過去と現在の架橋」をテーマに、国内外の研究者との活発な交流を促進してきました。

藝文学研究会

UIAユニットの活動の軸である藝文学研究会を、本年度は計9回開催しました。このうち第25回・26回・27回は、山泰幸氏(関西学院大学教授)が長年携わっておられる、徳島県三好郡東みよし町における「哲学カフェ」との連携活動として開催されました。

また、年度の総括として藝文学研究会シンポジウム「文人と芸術」を2024年10月30日に開催しました。



- 第19回: 黄昱氏(立正大学特任講師)
「怪異と医学: 中国と日本における『人が水と化す』説話の展開」
- 第20回: 上原究一氏(東洋文化研究所准教授)
「誰が呂布を最強にしたのか: 古典文学におけるキャラクターと『作者』たち」
- 第21回: 裴輪顯量氏(人文社会系研究科教授)
「仏教の瞑想とマインドフルネス」
- 第22回: 伊丹氏(EAA特任研究員)
「医学と文学との狭間——『人面瘡』を通してみた医事説話」
- 第23回: 張文良氏(中国人民大学教授)
「『共在』・『共成』と『関係性の思考』」
- 第24回: Kai Vogelsang氏(ハンブルク大学教授)
「Beijing: A City Between the Ages」
- 第25回: 伊丹氏(EAA特任研究員)
「病とは何か——古代中国と日本における『病、膏肓に入る』の話を読む」
- 第26回: 黄霄龍氏(EAA特任研究員)
「共同体・日常・衝突——寺院史料から日本中世の地域社会を読み解く」
- 第27回: 柳幹康氏(東洋文化研究所准教授)
「東みよし町から考える総合学芸知」

Legend of Legacy Nanfu by utsubomonokataru (吟楽琴「南風」—「宇津保物語」に描かれる古琴「クアラルンブル」公演)

一般社団法人日本古琴振興会、マレーシア不動学堂との共催のもと、日本最古の長編物語といわれる「宇津保物語」の世界を、語りと古琴演奏によって舞台化しました。国内外の研究者・演奏者のご協力のもと、本ユニット所属教員の田中有紀氏(東洋文化研究所准教授)が中心となって推進してきたこのプロジェクトは、アカデミアと社会の新しい協働の形を示しています。



「東アジアと仏教」シンポジウム



本ユニット所属教員の柳幹康氏(東洋文化研究所准教授)のもとで継続開催されている「東アジアと仏教」研究会の派生企画として、今年度は二つのシンポジウムが開催されました。シンポジウム「佛法東漸: 從印度到東亜の佛教軌跡」では、日本・中国・台湾の研究者が一堂に会して中国語・英語・日本語を用いて研究交流を行いました。また、シンポジウム「宋代文化と日本」は、EAAの若手研究者にとって、第一線の研究者と共に登壇し議論を行う貴重な機会となりました。

シリーズ「情動と政治」

本ユニット所属の崎濱紗奈氏(EAA特任助教)のもと、「情動と政治」をテーマとした連続企画の一環で、本年度は『情動、メディア、政治——不確実性の時代のカルチュラル・スタディーズ』の著者である川村覚文氏(大妻女子大学准教授)をお招きして公開書評会を開催しました。「世界的に広まる政治的分断に象徴される社会的課題に対して研究者はどのように応答できるのか」という問いを念頭に置き、学問の社会貢献のあり方を模索するプロジェクトです。



ダイキン東大ラボ後援

EAAトークシリーズ「空気のデザイン—共に変容する Designing Air—Through Changing Together」

様々な分野でご活躍の企業人と主に人文系研究者を1名ずつお招きして、科学技術の発展や持続可能性への要求がもたらす社会変容と人間の心身の変容について議論を行う対談企画。ハイブリッド形式によるセッションを計7回開催。株式会社クボタ、ダイキン工業株式会社、株式会社日立製作所、東日本旅客鉄道株式会社、サントリーホールディングス株式会社、株式会社メルカリ、株式会社博報堂からゲスト・スピーカーを招聘。対談相手は、社会学者、文学者、文化人類学者、哲学者など。2025年度も引き続き企画が進行中。社会人を含む幅広い層の方々にご参加頂けるよう、開催時刻を夕刻に設定。第4回を除く全セッションを八重洲アカデミックコモンズにて出前開催。

第1回 水と空気が交わる場所—これからの環境デザイン

2024年6月4日開催



水処理技術者の岸野宏氏（クボタ）と社会学者の福永真弓氏（東京大学）が登場。

第2回 空気のブランドのデザイン

2024年6月12日開催



インダストリアル・デザイナーの関康一郎氏（ダイキン工業）と現代美術家の齋藤帆奈氏が登壇。

第3回 地域を共有する—空気・風土そしてエネルギー

2024年7月2日開催



日立東大ラボ副ラガ長の吉本尚起氏（日立製作所）と文学者の片岡真伊氏（国際日本文化研究センター／EAAフェロー）が登場。

第4回 TAKANAWA GATEWAY CITYが創る空気

2024年7月30日開催



TAKANAWA GATEWAY CITYの開発に従事されている松尾俊彦氏（JR東日本）と東京大学One Earth Guardians育成プログラムを運営されている中西もも氏（東京大学）が登場。

第5回 水と空気の故郷・森林を守る

2024年10月24日開催



「サントリー天然水の森」プロジェクトの提唱者である山田健氏（サントリー）と文化史研究者の久野愛氏（東京大学）が登場。

第6回 Mercariのエスノグラフィ

2024年12月6日開催



株式会社メルカリの研究開発組織mercari R4Dを主導されている多湖真琴氏（当時）・井上真梨氏と文化人類学者の大川内直子氏（国際大学／株式会社アイデアファンド代表取締役社長）が登場。

第7回 自己発見と共創する組織・社会

2025年1月10日開催



ファシリテーション実践の第一人者である兎洞武揚氏（博報堂（当時））と哲学者の梶谷真司氏（東京大学）が登場。

ご挨拶

東アジア藝文書院院長
石井 剛



2024年度の活動報告書をお届けいたします。EAAは3年を1期として活動しており、今年度は第2期の最終年度でした。今期は、発足時以来のダイキン工業株式会社様からの寄附金による活動に加え、潮田洋一郎様より新たにご支援を賜り、潮田総合学芸知イニシアティブ(UIA)として新たな学問領域の開拓にも取り組んで参りました。

EAAの研究教育は学外の企業、団体や個人の皆さまからのご寄附を得て運営されており、人文学領域における社会連携の実践例であると言えます。社会連携や産学連携と言え、ふつう応用領域における共同研究開発がイメージされます。しかし、宇沢弘文の概念に従えば、大学とは本質的に社会構成員の広い信託によって維持されるべき社会共通資本です。

「人文」とは人々が紡ぎ養いあう豊かな社会のさまで、人文学系こそは社会からの信託の下で大学の本領を保つにふさわしいと言えるでしょう。わたしたちは、各界の皆さまの志によって支えられることで大学の本領を保ち、世界の平和と繁栄に寄与していける人を育てていくことができることに、対して尽くせぬ喜びを感じながら、今後も進んでいきたいと願っています。支援者の皆さまに深く感謝いたします。

ご寄附への御礼

本プロジェクトは、ダイキン工業株式会社様、潮田洋一郎様からいただいたご寄附により支えていただいております。

教育活動では、北京大学の学生との交流や、EAAユースの留学支援など、若い世代が国境を越えて学び合い、視野を広げる機会をつくることができました。研究活動においても、国内外の研究者との対話や連携を深めるための旅費や滞在費に活用し、学術ネットワークの拡充に寄与しています。

また、プロジェクトの運営には若手研究者や研究マネジメント人材の参画を促し、EAAが教育・研究活動を通じて、次世代を担う人材の成長を支える場となることを目指しております。

皆さまの温かいご支援に、心より感謝申し上げます。

活動・寄附に関するお問い合わせ

info@eaa.c.u-tokyo.ac.jp

SNS 情報

日々の活動情報をお伝えしております。
ぜひフォローしてください。



EAAウェブサイト



X



Facebook

PJ 情報

東京大学東アジア藝文書院

本郷オフィス 東京都文京区本郷7-3-1 東洋文化研究所208号室

駒場オフィス 東京都目黒区駒場3-8-1 101号館15号室



EAA